

# 村研のエネルギー

## 組織論的志向をもとう

青藤吉雄

早いもので村研はまもなく十周年を迎える。村研のユニークな性格とエネルギーは、村落を共通の研究の場とする異なつた分野のひとつとが互に社交儀礼ぬきで卒直に交流できる寮開領とともに、なによりも現実の村落生活における中核的問題をつねに着実な実証とともに取上げてきたという点に由来するといつてもよいであろう。発足以来の大会課題をふりかえつてみても、『農地改革と農民運動』、『農家人口の変動と家族の構造』、『村落協同体』などは、社会的にも多くの学会でも広く関心を集めていた重要な問題であつた。きわめて大雑把な表現であるが、それらの課題をめぐつていわゆる「封建遺制」論と農村社会学の先進によつて蓄積されてきた家族・同族の研究との結びつきを可能とし、また「村落共同体」論は社会学における「家運命」、『自然村』、『村落構造』論などと密接の連続線的に符合する傾向を生みだした。いわば経済史学や歴史学と社会学がはじめて着実な協同で共通の関心の場を具体的に村落生活の中に見出すことができたのであり、このような状況

こそ村研のエネルギーをもつとも思はせしめ、その原因のひとつであると考えてよきそうである。

しかし村落の変動は激しく、その中核的問題も変質しつつあるとも考えられる。卒業農業生産増進や農政は大きな転換期に直衝してゐるし、地方町村合併をはじめとする地方行政の中央集権化の傾向や、いわゆる地蔵開き事業の進展ともたいて、多くの村落は多かれ少かれ急激な変動過程にあることはいふまでもない。村研の年次課題も、これらの状況を反映してか、『政治行政と村落』、『農政の方向と村落社会』、『共同化』などを、きわめて現存的で重層的な問題に移行するようにあつてきた。『社会学と社会的現実の科学的自覚化』がある。とすれば、まさに変貌しつつある村落の基本的問題に立ち向ふことが当然の要請であり、そこから村研の課題的なエネルギーを誘出せしめることも可能である。

しかし卒直にいつて、村研の従来の伝統的性格からすれば、右方に消化しきれない代物をいさなり欲込んでいさな下痢気味の気配もなないわけでもない。『村研の使命』という表現は、ヤマトパーだが、異なつた分野からの空気がますますに期待されたから社会学以外の参加者が積極的に減少しているのは事実であり、発表や討論もかみあうための共通の基盤が薄れてバラバラの発言が多く、研究成果の統合への努力が必ずしも積極的に遂行されてい

ないような感もたいておけない。これは試みとしての新しい傾向が芽生えるための痛みであり、おそらくそこは村研の新しい飛躍のためのエネルギーが蓄められているのかも知れない。

しかし村研の共通の場とは、たんに空間的な意味だけで村落が共通の対象となつてゐること以上のものであると思われる。再びおまかを表現とをり誤解される危険が多いが、村研研究において客観的に重要と思われる問題を生民の主体的な意識にかかわりなく客観的に記述し分析し、そのいわゆる世界史的位階づけを試みることは、比較研究と社会科学の認識の発展に大いに貢献するであろう。しかし具体的な個々の農民にとつて、それはあくまでもオマセ者の『よそ屋』としか映らないであらう。もし、かつて存在したと思われる村研の共通の場なるものが、個性的で歴史的本質の村落の著性を内制から理解しようとすることにあつたならば、住民自身の微妙な利害感や彼等の主體的なベースペクテブに對する深い洞察に共いて、おれわれの研究課題を位置づけ解明していくことも必要である。現在圧力的に組織論的を圧力を及ぼしている農政や大企業、流通機構に直接対したかのみまで対応せねばならぬ農民にとつて、階級分断による利害の分裂ともたいて、伝統的な家運命や地域的連帯などのような意識をもつていふか自分自身に考慮せねばならない緊急な問

別のひとつであると考えられる。標題で「東洋に『辯護論的志向』」と符したのは、このよりの視角を強調したために他ならない。